

AG5 だよ

校長調査に基づいた補習授業校プログラム開発の方向性
—グローバル社会の次世代を育てるフロンティア—

AG5委員 奈良教育大学教育学部教授 渋谷 真樹

私たちAG5プロジェクトでは、将来グローバルな社会で役立つバイリンガル・バイカルチュラルな能力を育てるために、補習授業校における日本語能力向上のための総合的なプログラム開発に取り組んでいます。プログラム開発にあたって、まずは、補習授業校の現状や課題、ニーズをしっかりと踏まえる必要があります。そこで、私たちは補習授業校の校長にご協力いただき、教育の内容や方法、子どもや家庭、教員についてなど、57項目の質問にご回答いただきました。



二〇一七年七月号の本誌「タマテバコ」では、その調査結果の第一弾として、アメリカの補習授業校八校について報告しました。

その後、私たちは、アメリカの補習授業校七校を訪問し、校長・副校長、運営委員、教師、保護者、児童生徒の皆様からお話を伺うことができました。その概要は、同年十一月号、十二月号の「タマテバコ」でお伝えしています。他に、帰国した校長からお話を伺う機会も得ました。

こうして私たちは、北米十六校、ヨーロッパ二校、アジア一校の計十九校の補習授業校からご回答いただくことができました。

今回は、これらの調査を踏まえてみてきた、今後のAG5の補習授業校プログラム開発の方向性についてお伝えしたいと思います。

なお今回の報告は、おもにアメリカの中・大規模の補習授業校を対象としています。アメリカ以外の地域や小規模校には、また別の現状や課題があるでしょうから、今後の課題にしていきたいと思っています。

補習授業校の多様化への対応

すでに二〇一七年七月号の「タマテバコ」でお伝えしたのですが、

今回の調査で再確認されたことは、補習授業校には、数年で帰国する予定の子どもから、現地で生まれ育った子どもまで、さまざまな子どもたちが集まっているということです。概して、帰国予定がある家庭は、学齢相当の日本語力を前提にして、学力の向上を望んでいます。一方、帰国予定のない家庭では、日本語に親しむ、会話力を中心に日本語力を伸ばすことを求めています。

けれども、駐在か永住かだけで一概に語ることはできません。今回の訪問調査では、国際結婚家庭や永住家庭で、きわめて熱心に子どもの日本語教育をしている多くの家族に出会いました。また、帰国か永住かが不明な家庭が多いことにも留意が必要です。ひとつの国から別の国へと海外での移動を繰り返す家庭もありますし、社命ではなく、家族自身の希望や都合で、住む国を決める家庭も増えています。

さらに、補習授業校ごとに児童生徒の多様化が異なっています。依然ほぼすべてが駐在家庭の子どもという補習授業校がある一方、永住家庭の子どもが過半数の学校もあります。このような実態を踏まえて、私たちAG5プロジェクトは、一律のプログラムを提示するのではなく、各

学校や学級の現状に合わせて教師が活用できるような、汎用性の高いプログラムを開発する必要があると考えています。現にこれまでもいくつかのモデル・カリキュラムや教案が示されてきたのですが、実態に合わずに、なかなか使われないうままになってしまいうことが少なくありませんでした。

ですから私たちは、たたき台にしてもらえるような使いやすい案を提示して、あとは子どものニーズを一番よくわかっている担任の先生に創意工夫していただける仕組みを作っていきたく考えています。

補習授業校という聖域サクラチユウ

今回の調査で確認されたことの二つ目は、当たり前のことかもしれませんが、やはり「補習授業校は必要とされている」ということです。塾でも通信教育でもなく、今はやりのインターネットでの家庭教師でもなく、補習授業校が必要とされているのです。日本語力を身に付けたり、教科の力を伸ばしたりすることだけに特化するならば、補習授業校よりも効率的な方法があるかもしれません。けれども、大切な土曜日にわざわざ遠くから子どもたちが補習授業

校に集まってくるのは、そこに同じような背景を持つ友だちがいて、まるで日本の学校のような空気が流れているからです。

補習授業校の利点については、各校から多くの意見が寄せられました。日本語力の保持や伸長、国語や算数などの教科力の向上といった項目も挙げられましたが、日本にルーツを持ちながら、海外で育っている子どもたち同士が学び合い、友情を深めることや、日本の文化や教育のスタイルを学習することも、補習授業校の大事な点として挙げられています。補習授業校は、圧倒的に現地の文化に囲まれた環境^{サウンズユア}下における、日本文化の保護区、聖域といえるかもしれません。

ですから補習授業校では入学式や卒業式で日本の式典のあり方を学んだり、運動会で日本の学校文化に触れたりすることも重要です。授業中にトイレに行くことについて、現地校では許されているけれども、補習授業校では、あえて日本の学校に準じた指導をしている、という回答もありました。

ある補習授業校では、夏休みの宿題として、「図書プロジェクト」と題して、日本語の本を読んで作者や主人公への手紙を書いたり、本の帯や

表紙を作ったりする活動を行っているそうです。海外ではなかなか手が伸びにくい、日本語の本に親しんでもらう工夫ですね。また、「漢字チャレンジ」や「都道府県名テスト」を行い、好成绩者に合格証を出して、覚えにくい知識を吸収するためのモチベーションを高めているそうです。

さきほど述べたように、補習授業校では、日本語力や将来設計の異なる子どもたちが学んでいます。ニーズに応じたクラスやカリキュラムを用意している補習授業校は少数です。このことは、個々の能力やニーズに応じて効率的な指導をすること以上に、補習授業校では、日本にながりを待つ子どもたちがいっしょに学ぶことを通して、日本の子どもたちと共通の経験を積むことを優先していることが背後にあるのでしよう。

日本の学校に合わせるための 試行錯誤

ですから、今回ご協力いただいた多くの補習授業校で、日本の学校と同様の知識を得るために、日本の教科書に沿って、日本人の先生がクラスで一斉に授業をしていることは、ある意味で子どもたちに日本の子どもたちと同様の経験をさせたいとい

う補習授業校に集う家庭のニーズに合ったことと言えます。

けれども、このことが教師や保護者、そしてなにより子どもたちにもストレスを与えているという現実もあります。たかさんの宿題や漢字テストに泣きべそをかく子ども、金曜日の夜が戦場と化してしまっている家庭は、例外ではなく、むしろ典型です。

そうした無理についていけない児童生徒や家庭は、卒業を待たずに補習授業校を去っていくという残念な事実は、あちこちで確認できます。「小学三年生と中学でやめる子どもが多い」という回答が複数ありました。

多い補習授業校では、毎年二割程度がやめていくそうです。途中でやめる理由としては、現地校での学習や、スポーツなどの学校外活動が忙しいこと、学費や親の負担といった家庭の事情もありますが、多くの補習授業校が異口同音に挙げたのが、日本語力や学力がついていけないということでした。

週にたった一回しかない補習授業校で、日本の学校とまったく同じカリキュラムをこなすことが不可能なことは、みんな承知しています。今回の調査では、「日本国内の授業内容を一〇〇とすれば、補習授業校の

授業時間数でできることはいくらくらいとお考えですか？」という意地悪な質問を、あえてさせていただきました。八〇パーセントという回答もあったものの、「二〇パーセント（基礎基本の部分）」、「日本よりはるかに下」という回答もありました。

補習授業校のよさを生かした 学びの提案

そこで私たちAG5プロジェクトは、海外での週末だけの授業で日本の学校と同じことをするという不可能に挑むよりも、むしろ補習授業校だからこそできるグローバルな学びへと転換していきたいと考えています。

多くの補習授業校から、「自校の生徒こそグローバル人材（の予備軍）である」とか、「自校はグローバル人材育成の最先端にいる」など、グローバル人材育成に結び付けた声をいただきました。「補習授業校の子どもたちは国際性や国際感覚に優れ、日本の国際化を進めていくうえで推進役になる『国家の宝』なので、国民に補習授業校の存在価値を広く知らしめ、財政支援を厚くすべきだ」という意見や、「複数文化での育成によって、科学的思考ができやすく、マイノリティの立場が理解できる」

という回答もありました。作文発表会や意見文発表会を行って、異なる文化を通して学んだ考えや経験を表現させている補習授業校や、多様な視点から第二次世界大戦について考える授業を行っている補習授業校「キャリア講演会」として海外で活躍する日本人を招いて高校生の進路指導をしている補習授業校もありました。こうした意欲的な取り組みを参考に、ぜひ補習授業校ならはのよさを生かしたプログラム開発をしたいと考えています。

また補習授業校には、せっかく日本というルーツを共有する子どもたちが集まっているのですから、そうした子どもたちに、なるべくいっしょに長く楽しく学び続けてほしいと、私たちは考えています。日本につながる仲間と一体感を持ちながら、日本語で新しい世界を知り、自信を持って自分の意見や考えを発信してほしい。それが、グローバル人材の第一歩です。

日本の学校もここ十年で大きく変化しており、主体的・対話的で深い学び、すなわちアクティブ・ラーニングへと舵を切っていることにも留意が必要です。今回の回答の中には「補習授業校は知識を増やしたい学校なので、アクティブ・ラーニング

はやりにくい」というご意見もありました。しかし私たちの調査では、アメリカで学ぶ子どもたちは、日本の同年代の子ども以上に、自分の意見や考えを発表するのが得意だと感じていることがわかっています。次号で詳しくお伝えしますが、特に永住予定の子どもたちは、現地校で積極的に課題学習や話し合いに参加しているようです。現地校で学ぶ子どもたちのよさを生かして、子どもたちを学習の中心に据えてみてはいかがでしょうか。

アメリカの補習授業校は、国語科以外に社会科学の授業を行っているところも少なくありませんが、日本語や日本文化に触れる機会が限られている子どもたちにとって、日本の産業や歴史はイメージがしにくく、とりわけ社会科学の語句が難しい、といった声が挙がっています。そこで私たちAG5プロジェクトでは、国語科と社会科学との合科的な授業を考えたいです。

たとえば、子どもたちが今住んでいる地域について調べて、それを日本語で発信する学習活動です。日本の教科書ではいくつかの都道府県が例として挙げられていますが、海外に住む子どもたちにとって身近に感じられる地域を取り上げることによ

って、地形や産業といった社会科学に必要な語彙や概念とともに、レポートの書き方や発表の仕方といった国語科でのスキルを、より効果的に学ぶことができそうです。テーマに沿って調べたり、みんなの前で発表したりといった、現地校で学ぶ子どもたちが得意な面を發揮させることもできます。詳細は、追ってこの「AG5だよ」でお伝えしていきたいと思っています。

補習授業校のエンパワーメントに向けて

最後に、どの補習授業校でも、優秀な教師の確保に苦心していることがみえてきました。そもそも在外邦人の中で就労できる滞在資格を持つ人は限られています。今回ご回答いただいた補習授業校では、日本の教員免許を持つ人の割合は二割から七割で、免許保持者が過半数を占める補習授業校は少数でした。日本での教職経験のある人は、一割から四割程度です。多くの補習授業校の先生方は、平日は会社員、主婦、語学教師といった別の顔を持ち、週に一回だけの非常勤講師として勤めているのです。

ですから、校内研修会で授業を検討し合ったり、他の補習授業校との

合同研修会を行ったりなど、各校でさまざまな工夫がなされていますが、十分な研修時間を取ることは至難の技です。まして、独自教材を作成することなどは、時間的にも力量的にも難しいという補習授業校がほとんどでした。

そこでAG5プロジェクトでは、成果発信専用のウェブサイトを設け、その中に世界中の補習授業校の先生方が教案や教材を共有できるように場所を作りたいたいと考えています。近々、この「AG5だよ」で公開できる予定です。

補習授業校は世界中に点在していますが、ICTは強い味方になります。すでに、デジタル教科書やインターネットを使った調べ学習など、ICTを積極的に利用している補習授業校もあります。日本の情報を発信したり、在住地と日本とのあいだでコミュニケーションを取ったりするために、ICTを積極的に活用していくことも、AG5プロジェクトですすめていきたいことのひとつです。

補習授業校は、足りないものを補う学校ではなく、グローバル社会で活躍する次世代を育てるフロンティア、それが私たちAG5プロジェクトのモットーです。